



ポーランド友好訪問参加者の声

私は今、聖心女子大学大学院に所属し、臨床心理学を学んでいます。私が心理学を学ぶきっかけとなった出来事が、2015年に参加したポーランド友好訪問です。

参加の募集がかかったときに、ニュージーランドの訪問と迷っていましたが、父の「ニュージーランドはいつでも行けるしポーランドにしまよ」という一言で、ポーランドを選んだことを覚えています。ポーランド友好訪問では民族衣装を着て踊ったり、岩塩抗で壁を削って塩をなめたりと本当に楽しい時間であふれていました。楽しい時間ばかりではなく、震災の体験をポーランドの学生に伝えたり、アウシュヴィッツ強制収容所を見学したりし、重要な歴史を耳にしました。特にアウシュヴィッツ強制収容所の出来事は、私の人生において大きな出来事になりました。この出来事が、私が心理学への道を選ぶきっかけとなったからです。

アウシュヴィッツ強制収容所を見学している時は、あまりの悲惨さに気持ちが追いつかず、ただ目の前に映る景色と、ガイドさんの話についていくことで精一杯でした。帰国後、強制収容所を訪れた経験をもっと濃い経験にしたいと思いフランクルの「夜と霧」を読みました。

この本は、心理学者であるフランクルが強制収容所の体験を綴ったものです。本にはおびただしいほどの苦しみが書かれており、読み進めるのに多くのエネルギーを必要としました。収容所では、クリスマスが近づくと、クリスマスは家族と過ごすために、収容所から出られるのではないかという噂が広まり、多くの人が、クリスマスを家族と過ごすことを想像しながら想像を超える苦しみに耐えました。しかし、クリスマスに家に帰ることはできず、多くの人が、クリスマスの後日、命を落としました。この事実を本で読んだとき、私は、人間が家で食卓を囲むというごく当たり前なことを希望にして、生きようと思えることに驚き、人間精神の崇高さに感銘を受けました。そして、どんなに過酷な状況であっても未来に向かう人間の心はどのようなものなのか知りたいと思いました。

このことをきっかけに心理学部に進学しました。4年生になり、周りが就職活動をする中で、自分が進学することへの不安は非常に大きく、本当にこれでいいのか、後悔するのではないかと悩んだことも多くありました。しかし、アウシュヴィッツ強制収容所で経験したこと、そして、夜と霧を読んで心理学を目指そうと思った自分を、裏切ってはけないと思い、進学を決意しました。

卒業後も、多くの友人が就職する中で、自分だけ取り残されたような気がしていました。そのような時、ポーランド友好訪問でお世話になった兵頭先生が、私の心を読んだかのように、「自分が関心を持った勉強を続けることを私は誇りに思う。」「あなたの勉強が誰かの人生を変えたり、救ったりするのです。」というメッセージを送って下さいました。訪問から何年もたっているのにも関わらず、こんなにも愛のあるメッセージを送ってくださったことが嬉しく、そしてそんな先生に出会うことができ本当に良かったと思い、涙が止まりませんでした。

心理学を学んで、4年が経ちますが、人間の心がどのような存在であるかはまだまだ分かっていません。しかし、人間が絶えず変化し、未来に向かって生き続ける存在であるということを、この4年間で学びました。私は、将来心理師として生きる意味を見失った人々や困難に陥った人々の支えになりたいと考えています。きっと、生身の人間を目の前にしたら、どんなに知識や経験を積んでも太刀打ちできないのだろうと思います。しかし、知識や経験がなければ、その人と向き合うこともできないと感じています。一人の人間、そして心と向き合うためにもこれからも絶えず、心理学の道を歩んでいきたいと思っています。

ポーランド友好訪問は、私にとって、生きる意味を教えてくれた出来事であり、この経験を支えとして、これからも生きることが私に何を期待しているのかを考えと行動によって模索し続けたいと思います。